

留学報告書

2024年6月

立石 泰佳

University College London (UCL)での PhD に入学してから早くも3年が経過しようとしています。経済学 PhD に基本的に5-6年かかることを考えると折り返し地点に到達したということで、これまで過ごしてきた日々には充足感を覚えつつ、焦りを感じることも増えてきました。執筆が遅くなりましたが、3年目の生活について報告させていただきます。

PhD upgrade

UCL では3年目のはじめに研究発表をすることで PhD candidate になるかが決まる、通称 upgrade seminar というものがあります。アメリカでの qual exam の代わりに行われているという認識です。私はメインで行っているウガンダでの研究成果を発表したかったのですが、共著者も同学年の PhD の学生なので、2人が同じプロジェクトの発表をするのは認められないと言われてしまいました。一応早いうちから同じプロジェクトでも良いのか問い合わせ、指導教員からは許可が出ていたのですが、学部側から NG が出たのが発表1カ月前でかなり困惑しました。

結局私が1年目に書いた論文について発表し、共著者がウガンダのプロジェクトを発表することになったのですが、しばらく放置していたプロジェクトについて考え直す良い機会になりました。1年目に執筆した時は締め切りもあって急いで分析を進めていたものの、指導教官と改めて話し合っって議論の方向性を修正したり、そのための追加分析をすることで内容を向上させることができたと思います。1カ月間で内容を修正して発表の準備をするのは非常に目まぐるしかったです。結果的に学会で発表できる原稿ができたのも良かったです。

Upgrade seminar では2人の指導教官だけでなく他の先生からも建設的なフィードバックを貰い、無事に PhD candidate になることができました。データの制約はありつつもトピックが面白いからもう少し内容を詰めて雑誌への投稿を目指そうと言ってもらえたのが嬉しかったです。発表後に送られてきた committee からのコメントで “Yasuka is a very talented, hard-working, and independent student, who has shown a lot of initiative and entrepreneurship” と書かれていて、研究にも高い評価を受けることができ、モチベーションがあがりました。

学会発表

3年目は何度か学会発表の機会があり、12月に国立台湾大、4月にシカゴ大、スタンフォード大で発表することができました。Upgrade seminar で発表したプロジェクトについて報告しました。どの学会でも多様なフィードバックを貰えて充実していたのですが、特にスタンフォードでの発表は PhD の学生10人だけで、活発に議論できただけでなく、セミナーディナーでも発表した学生たちと仲良くなることができました。

ウガンダ渡航

ウガンダでの研究に関しては首都カンパラの政府機関のデータセンターでしかデータが使えないので、数カ月に一度ウガンダに行く生活をしています。既に累計 6 回渡航していて、この 1 年間でも 10 月に 3 週間、2-3 月に 1 カ月、そして 6 月に 2 週間滞在しました。カンパラでの生活は朝から晩までデータラボに籠って作業しているので忙しく、結局ロンドンにいるのとあまり変わらない生活をしています。

6 月の渡航は International Growth Centre (IGC) のウガンダ事務所が主催するワークショップでの発表が目的で、政治家や現地の研究者の前で研究成果を発表する機会がありました。研究を一般向けに分かりやすく説明するトレーニングになりましたし、研究を始める前の段階でフィードバックを貰った政治家の方々と再会して成果を共有できました。また、青年海外協力隊の方とお話する機会もあり、元々はアフリカで実務家として働きたいと思っていた頃の好奇心・探求心が蘇りました。普段は交友関係も研究を話す機会もアカデミックなコミュニティの中に閉じてしまいがちですが、実務で携わる人たちに面白いと思ってもらい、長期的に政策に反映されうる研究をしたいと改めて思いました。

今回の渡航で何ととっても印象に残ったのは、ウガンダ研究で有名な若手の先生たちと仲良くなったことです。ワークショップで発表した研究者たちで懇親会があり、お酒が入りながらも絶えず研究の話をし続け、私の発表にもコメントをしてくれる先生方と話して、今後の研究の方向性についても新しいアイデアを得ることができました。その懇親会で盛り上がった結果、翌朝ワークショップ開始前の朝 7 時から先生たちとテニスをし、さらに私のフライトイレギュラーで先生の 1 人とエチオピアまで同じ便になり、長い道中研究の話をすることができたのも楽しかったです。私は大規模な学会では特にソーシャルするのが苦手で、自分は PhD の学生だから話す価値はないと思われるだろうと考えて卑屈になってしまうことが多々あるのですが、このようにフランクな形でウガンダ研究者コミュニティに入れたという感覚があるのがとても嬉しいです。

また、2-3 月の滞在は長期間だったので、週末を利用して国立公園に行く機会がありました。南西部の Bwindi 国立公園でマウンテンゴリラを、Mabamba Swamp でハシビロコウを、そして Murchison Falls 国立公園でハイエナの狩りの瞬間を見ることができたのが特に感動的でした。地方はカンパラとは全く違う様相で、経済が極端に一極集中する様子を肌で感じることもできたのも研究を進める上で良かったです。ウガンダは気候も過ごしやすく人も優しいので、渡航するのが毎回楽しみです。今後も研究助成を獲得してウガンダでの研究を続けていきたいと思っています。

ロンドン生活

3年間住んでみてロンドンはどう？と聞かれることが多いのですが、正直ここ最近はインフレと円安のせいで生活面の満足度が落ちつつある、という答えることが多くなっています。去年の夏には家の契約更新のタイミングで家賃が18%上がり、家の近くのパブではビールの値段が誇張ではなく2倍になり、ポンド・円レートは私がPhDを開始した2021年は1ポンド=150円台だったのが、今では200円を突破してしまいました。ありがたいことに船井の奨学金はドル建てなのでこの3年間は為替をそれほど気にしなくても良い生活だったのですが、4年目以降大学から支給される stipend の額が上がる気配がないことも相まってどうしても気にかかってしまいます。しかし、レストランなどでお金に見合う価値が提供されていると感じることは少なく、日本の質の高いサービスが恋しくなります。この夏は引っ越すつもりで家の内見を進めているのですが、家の古さ・狭さに対して家賃が非常に高いので、つつい日本円に換算して馬鹿らしく感じています。加えて冬は日が短く雨も多いので気分が晴れない日ばかりで、最近はいかにロンドンの冬を避けるかばかり考えています。

もちろん面倒見の良い指導教官や、気軽に議論できる友人／共著者がいて、研究環境としては申し分なく、生活面の不満を差し置いてもロンドンに来てよかったと思っています。また、ヨーロッパに旅行に行ったり、全英・全仏オープンでテニスの試合を観たり、ハーフマラソンに参加したりと充実した余暇を過ごしています。特に冬に鬱々としてしまう環境に上手く対処しながら、研究に邁進していきたいと思います。末筆になりますが、船井井情報科学振興財団の皆さまからのおかげでこの3年間研究に打ち込むことができました。改めて感謝を申し上げます。これからも宜しくお願い致します。



台湾の学会



ウガンダの首都・カンパラ
バイクタクシーに乗るのにも慣れてきました

ウガンダで見た動物



ゴリラ



ハシビロコウ



アンコーレ牛



キリン